

PROGRAM

L. ファランク Louise Farrenc

交響曲第3番 ト短調 作品36

Symphony No.3 in G minor, Op.36

- I. Adagio — Allegro
- II. Adagio cantabile
- III. Scherzo. Vivace
- IV. Finale. Allegro

休憩15分 (intermission 15 min.)

F. メンデルスゾーン Felix Mendelssohn

劇付随音楽「夏の夜の夢」 作品61

A Midsummer Night's Dream, Op.61

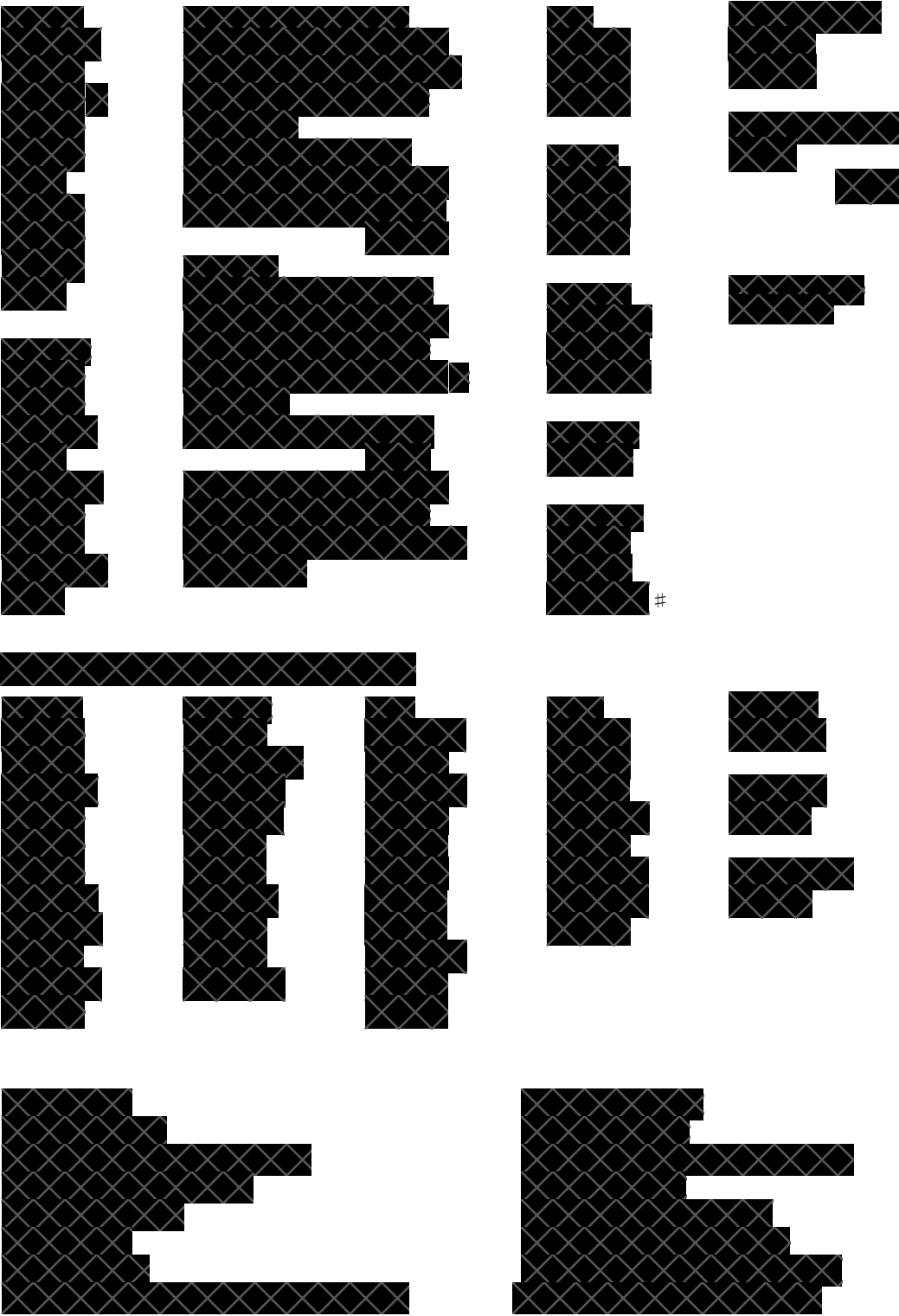
序曲 Overture (Op.21)

1. スケルツォ Scherzo: Allegro vivace
2. (妖精たちが飛んでるー) 妖精の行進 Elfen-Marsch: Allegro vivace
3. 歌と合唱 Lied mit Chor: Allegro ma non troppo *
4. (魔法の薬をお目目に): Andante
5. 間奏曲 Intermezzo: Allegro appassionato - Allegro molto comodo
6. (芝居の稽古ーロバ頭の男ー薬の塗りまちがい): Allegro - Allegro molto
7. 夜想曲 Notturmo: Andante tranquillo
8. (魔法を解いて): Andante - Allegro molto - Andante tranquillo
9. 結婚行進曲 Hochzeitsmarsch: Allegro vivace
10. (余興の芝居ー) 葬送行進曲 Marcia funebre: Allegro comodo - Andante comodo
11. 道化師たちの踊り Ein Tanz von Rüpel:n: Allegro di molto
12. (結婚式も終わり): Allegro vivace come

フィナーレ Finale: Allegro di molto *

* = 独唱&合唱つき／歌詞対訳あり

エウテルペ楽奏団



今後の演奏会のお知らせ

エウテルペ楽奏団 第41回定期演奏会

2025年9月20日(土) 14時開演(予定) 会場: 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

指揮: 平川 範幸 曲目: ベートーヴェン 交響曲第3番 変ホ長調「英雄」ほか

Webアンケートのお願い

アンケートはWebからでも回答いただけます。演奏会のご感想・当団へのご意見等、是非お寄せください。

アンケートQR

団員募集

現在エウテルペ楽奏団では弦楽器を中心に演奏活動に継続的に参加して下さるメンバーを募集しています。ご興味のある方は以下までご連絡下さい。

連絡先: symphonia.euterpe@gmail.com

S y m p h o n i a
“EUTERPE”
The 40th Anniversary Regular Concert

エウテルペ楽奏団

第40回

記念定期演奏会

2025 3 2 日 開場 13:20 開演 14:00

会場: 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

指揮: 石川 征太郎

独唱: ソプラノ 今井 里織奈 ソプラノ 駒井 ゆり子

語り: 梅里 アーツ

合唱: エウテルペ楽奏団第40回記念合唱団

S y m p h o n i a
“EUTERPE”

MESSAGE

がっそうだん
本日はSymphonia EUTERPE-エウテルペ楽奏団- 第40回記念定期演奏会へご来場いただき誠にありがとうございます。

当団でメンデルスゾーンの「夏の夜の夢」を取り上げるのは2回目ですが、前回はかれこれ20年以上前、2001年の第2回定期演奏会でした。それを思うと第40回を迎える今回の演奏会は大変感慨深いものがあります。当時はナレーションを入れずオケと歌だけで演奏しましたが、今回はとても楽しいナレーションがありますので、ストーリーも含め皆さまにも存分に楽しんでいただけるものと思います。

前半にとりあげるファランクはメンデルスゾーンの同時代の女性作曲家であり、女性として初めてパリ音楽院の教授になった人です。まだまだ世間には知られていませんが、ウィーン古典派の研究者ということもあり、当団にとっても大変興味深い作曲家です。初めて聴くという方も多いのではないかと思います。とても魅力的な曲ですので、ファランクの音楽が皆さまの心の片隅にでも残れば私どもとしても幸いです。

それでは、この午後のひと時を最後まで共に楽しみましょう。

Symphonia “EUTERPE” 団長 福井 正樹

エウテルペ楽奏団



1999年7月、カルトンオペラ(若手新鋭歌手を集めたオペラ団)との共催による「フィガロの結婚」上演を契機に結成。指揮者、橘直貴氏の構想のもと、それに賛同する有志が集い、「古典的2管編成を基本とする選曲」「声楽との共演」「時代考証をふまえた演奏」という3つの大きな活動の柱を掲げ、これまでに6回のオペラ公演、40回の演奏会および2回の室内楽演奏会を行う。

ギリシャ神話におけるミューズ9女神の一人、音楽と抒情詩を司る“EUTERPE”の名を冠したのには、音楽を既成の概念にとらわれ惑わされることなく、もう一度、源泉に立ち返った所から再創造して行こうという意図が込められている。演奏家一人一人が「よりよい音楽を」をモットーに、音楽について真剣に語り合えるオーケストラとして活動を続けている。

これまでにベートーヴェンおよびメンデルスゾーン&シューマンの交響曲ツィクルスに取り組んできた。2014年よりシュベルト・シリーズを開始。様々な指揮者と共演を重ねつつ新たな可能性を追求している。

公式HP

公式Facebook

公式LINE

エウテルペ楽奏団第40回記念合唱団

今回の演奏会のために特別に結成された女声合唱団。職業も合唱経験も様々なメンバーが集い、練習を重ねた。指導はソプラノ・駒井ゆり子。

PROFILE



指揮者：石川 征太郎

東京藝術大学音楽学部指揮科、ロベルト・シューマン音楽大学デュッセルドルフ指揮科卒業、同大学院修了。
藝大卒業時にアカンサス音楽賞受賞。2011、2012年度ロームミュージックファンデーション奨学生。2015年国際リチャルト・ワーグナー協会奨学生。2016年第1回フェリックス・メンデルスゾーン国際指揮者コンクール第2位受賞。
レパートリーはバロックから現代音楽まで幅広く、国内外で新作初演も積極的に行なっている。
2018年ハンブルク州立歌劇場にてペーター・ルジツカのオペラ「ベンヤミン」の世界初演の副指揮者、2023年には芥川也寸志サントリー作曲賞選考会にて指揮者を務める。
また、2019年のウィーンでのグラフェネック音楽祭ではトーン・キョン・ストラ管弦楽団との指揮のマスタークラス「インク・スティル・ウェット」で指導者を務めるなど、後進の指導にも携わる。
これまでに読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、日本センチュリー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、京都市交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団、札幌交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、アンサンブル金沢、神戸市室内管弦楽団、国外ではケルン放送管弦楽団、ノイエ・フィルハーモニー・ヴェストファーレン、コリアン・チェンバー・オーケストラ等を指揮。
指揮を田中良和、ハンス＝マルティン・シュナイト、ゲルハルト・ボッセ、リュウディガー・ポーンに、ピアノを林達也、ユーラ・マルグリス、コレペティトッパをゲルハルト・ミヒャルススキ各氏に師事。

ソプラノ：今井 里織奈

東京都出身。幼少の頃から桐朋学園大学音楽学部附属子供のための音楽教室にてピアノとソルフェージュを学ぶ。桐朋学園大学声楽科卒業。ピアノを磯崎敦子、声楽を半田美和子、駒井ゆり子、菅谷公博各氏に師事。数々のコンクールで金賞を得て海外公演も行う女声アンサンブルグループRegalo Tokyoメンバー。アンサンブル茉莉花メンバー。現在、桐朋学園大学院音楽研究科歌曲専攻修士課程一年在学中。可憐な容姿と美声を持ち、若手のホープとして活躍している。

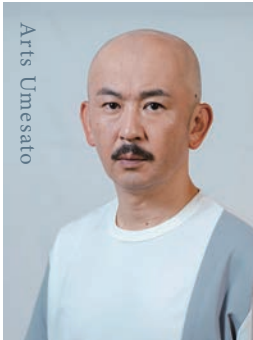


ソプラノ：駒井 ゆり子

東京音楽大学、同大学院修了。二期会オペラ研修所を優秀賞、奨励賞を得て修了。パリ・エコール・ノルマル音楽院にてコンサーティスト課程を声楽と室内楽で審査員満場一致、称賛付きを得て取得。首席で修了。全日本学生音楽コンクール、東京音楽コンクール、モーツァルトコンクール第2位、フランス国際オペラ声楽コンクール審査員特別賞、国際ベルヴェデーレオペラコンクール盛岡賞他、内外のコンクールで上位入賞を果たし、トゥールーズ国際フランス歌曲コンクール最優秀ピアノ声楽デュオ賞を受賞。文化庁海外派遣研修員(パリ)。二期会会員。桐朋学園大学、同大学院講師。

語り：梅里 アーツ

福岡県出身。学生時代は油絵を専攻。24歳で上京し俳優の道を進む。小劇場で初舞台を踏み、様々な劇団やプロデュース公演に出演。2012年より福島三郎主宰の劇団「丸福ボンバーズ」に参加。劇団の中心的メンバーとして旗揚げ公演以降ほぼ全ての作品に出演。劇団では宣伝写真やチラシデザインも担当。また、自身が作・演出・出演の三役を務める一人芝居を企画し、小劇場やカフェなどにて上演。日常の中で生きる人々をコミカルに描き好評を得る。2023年から写真家としても活動を始め、ポートレートを中心に精力的に撮影を行う。近年の主な出演作。ハイバイ20周年「て」（脚本・演出：岩井秀人）



PROGRAM NOTES

L.ファランク(1804～1875) 交響曲第3番ト短調 作品36

辻静雄によれば、今日のフランス料理の世界的な普及(世界中の都市に中華料理とフランス料理のレストランはそれぞれ必ずある)には、きっかけとしてフランス革命が重要な役割を果たしていると言う。つまりそれはざっくり言って、ご主人様である王様や貴族の好みの味と、味はともかくパーティー向けの見栄えのする料理を作ればそれで良かった料理人達が、革命によって職を失い市中にレストランを開業するに及んで、ご主人様ではない複数のお得意さんや不特定多数のわがままな客の舌を満足させられる様に腕を磨かざるを得なくなったから、と言うわけだ。それには色んな客の評価を、批評を素直に聴く姿勢が大事になってくるし、その都度お金を払って自分の料理を食べてくれる客を継続して引き留めるには、料理が美味しくなければ話にならないのは当然だろう。結果、フランス料理が磨かれていったのである。そこには資本主義の原則も関わって来るので、王様なんか要らないのだ。同じく辻静雄が言っている事だが、「料理」と「音楽」はその在り方が似ているそうだ。レシピ(楽譜)は存在するがその出来ばえは料理人(演奏者)に左右されるし、出来上がった料理(音楽)を味わえるのはその時その場所ですそれを食べられる客だけである。(音楽も味わえるのはその時その場所に来た人々だけである)更に現代的な問題まで言うと、出来上がった料理を例え冷凍なりで上手く保存(録音)出来たとしても、それは出来上がった時点での料理(生演奏)の味を超える事はない。と、書いて来てふと思ひ出すのは、きっかけは各々違えどモーツァルトやハイドンも人生の後半にはフリーの活動をしていた件である。ベートーヴェンもたぶん、モーツァルトやハイドンを参考に意識的に一人のご主人様には仕えない生き方を選んだのだと思う。それは例えるなら、3人とも耳の肥えたウィーン市民相手にレストランを開いたのである。当時オーストリアで革命は起きなかったけれど、3人とも一人のご主人様の好みに合わせたレシピ(楽譜)を描くのではなく、多くの人々に満足して貰えるレシピを描きたかったのだ。結果、モーツァル亭は一部の専門家には受けられけれども晩年は閑古鳥が鳴いていたし、外国での売り上げの良かったハイドン角は余裕の晩年であったが、庶民派の王ロツシーニの登場に見舞われたベートーヴ苑はその高邁さで叙々に敬遠された。3人の名前が現在でも残っているのは一部の専門家のレベルに後の時代の人々が追いついたからである。美味しいモノを作れば必ず繁盛するとは限らないのはいつの時代でも同じだろう。

さて、こういったレストラン興亡史を当時の人がどれだけ意識していたかは知らないが、本日演奏するルイーゼ・ファランクは1804年パリ生まれ、メンデルスゾーンより5才上の同世代で、ま、その頃には珍しい女性の作曲家である。高名な彫刻家一家に生まれ、幼い頃からピアノの手ほどきを受ける。ルイ14世が作った王立音楽院がフランス革命(1789～)により一般に開放されたパリ音楽院で、15歳から作曲科の聴講生(女性はまだ学生にはなれなかった)として学ぶ。17歳で10才上のフルート奏者のアリストテッド・ファランクと結婚しファランク姓となる。ピアノ奏者として活躍し、夫はそんな妻を支え楽譜出版業を起こす。22歳で一人娘ヴィクトリーヌを出産、彼女も後に職業ピアニストになる。38歳でパリ音楽院のピアノ科教授に就任、最初から教授として招かれたのに何故か給料は他の男性教授の半分なのを10年間、闘い続けてやっと内務省の規定額を勝ち取る。現代でもどこかの国でよく聞く様な話を、ごく限られた場とは言え一応の解決をみているのには驚く。約170年前の話である、やはり革命は必要なのか知らん?。まあ当時、女生徒には女性の教授(ファランク)が教える仕組みで、女生徒が相次いで首席で卒業してプロの演奏家になっていったという実績も後押ししたのかも知れない。

交響曲第3番はファランクが43歳の時に作曲、2年後の1849年にパリ音楽院管弦楽団により初演される。1828年に創立されたパリ音楽院管弦楽団はベートーヴェンの交響曲をレパートリーの中心に据えた当時としては変わった真面目な楽団で、ほぼウィーン古典派の曲しか演奏しないとされていた中、ファランクの新作交響曲が初演されたのは大変栄誉な事とされ、評判もよく現代でもファランクの代表作とされる。同じパリ音楽院のよしみで初演されたのかまでは判らないが、少なくともファランクはそのパリ音楽院管弦楽団のベートーヴェンの演奏をよく聴いていたのだらうと思う。何故なら15

歳のファランクがパリ音楽院で聴講したのはアントン・ライヒャの講義だし、彼はベートーヴェンと同年の友人でもあった。交響曲第3番に関してここにちょこちょこ具体的な解説を書く事も可能だが、せっかくなので筆者としては一昨年の中宮崎駿の新作映画が事前に全くCMされずに劇場公開された時の様に、事前情報がほぼ無い状態で音楽を愉しんで頂けたら、と考える。彼女が生きた時代の情報は少しは説明したつもりである。この曲に古典派の名残りを聴くか、ロマン派の入口を聴くか、はたまた新しい可能性を感じるかは貴方次第?です。ファランクはこの曲の初演の10年後にピアニストの一人娘を結核で亡くす不幸も味わうが、68歳までパリ音楽院の教壇に立ち、71歳にパリで亡くなった。

F.メンデルスゾーン(1809～1837) 劇付随音楽「夏の夜の夢」 作品21&61

演奏会用序曲「夏の夜の夢」作品21

1826年メンデルスゾーン17歳の時に作曲。当初は姉のファニーとピアノ連弾で愉しむ為に作曲したものの、出来がいいので姉の勧めもあり管弦楽に編曲し、当時メンデルスゾーン家で行われていた日曜音楽会(隔週開催)にてメンデルスゾーン指揮で初演される。もしタイムマシンがあるなら、個人的にはメンデルスゾーンと姉のファニーが愉しみながらこの序曲をピアノで連弾するのをこっそり聴いてみたいものだ。演奏会用序曲という呼称はこの曲から始まったと思われる。オペラや音楽劇の序曲で評判の良かったものをオーケストラの演奏会に於いて序曲だけ演奏するのは、ベートーヴェンの時代でも行われていた事だし、実際ベートーヴェンの序曲にも演奏会でのみ演奏される目的の序曲はある。しかし本来オペラなり音楽劇が完成してから序曲は作るものだし、色んな場面の音楽を部分的に引用してくるものだが、この序曲はシェイクスピアの「夏の夜の夢」の音楽劇が完成した体(テイ)で、演奏会で演れる序曲だけをいきなり作曲してしまったので演奏会用序曲と名付けたのだろう。でもだからこそこの序曲には、物語の色んな場面の音楽がそれぞれ想い描いて埋め込まれているし、序曲だけで物語全体の流れを想像できる様にもなっている。初演の日曜音楽会に招待された様な人々は皆シェイクスピアの「夏の夜の夢」をよく知っていたので、大変評判が良かったらしい。というより初演後はドイツ中に彼の名が知れ渡る一大センセーションになった。

劇付随音楽「夏の夜の夢」作品61

そして、色々あって17年後になる。メンデルスゾーンは34歳でライブツィヒに住みドイツ初の音楽学校を開校し実質の校長になっていたし、ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者を8年もしてドイツのオーケストラに育ててきた。それと同時に実家のあるベルリンでも年11回の演奏会を指揮する約束があり、しかしライブツィヒでは名誉市民の称号を与えられたのに比べたら、ベルリンでの彼の評価は余り芳しくなかった。そんな中、ベルリンの隣町であるポツダムの新宮殿でシェイクスピアの戯曲「夏の夜の夢」を上演するから、その音楽の作曲と指揮をせよとの命令がプロイセン王からくる。本当は実家のあるベルリンで働きたいが評価はライブツィヒで大きかったメンデルスゾーンは、色々複雑な想いもあったが、この件を喜んで引き受ける。何故なら「夏の夜の夢」は、若き日に熱中して序曲を作る前にもベルリンの実家で皆で遊びで上演したくらいだからだ。この時のメンデルスゾーンは、ベルリン・ライブツィヒ間に鉄道が開通したとは言え片道7時間半を行き来したり、指揮に音楽学校に大変忙しく作曲の時間がなかなか取れなかったが、この曲は愉しんで作曲した。序曲に含まれるモチーフを更に膨らませるだけでいい部分もあるし、若き日に全て暗記したくらいの「夏の夜の夢」に音楽を付すくらいお茶の子さいさいであった。初演はポツダムの新宮殿で行われ、その後ベルリンに会場を移し3日間上演され大好評で大成功だった。

<安庵>

夏の夜の夢 歌詞対訳

3.歌と合唱 Lied mit Chor: Allegro ma non troppo

1. Elfe:
Bunte Schlangen, zweigezüngt!
Igel, Molche, fort von hier!
Dass ihr euren Gift nicht bringt
In der Königin Revier.
Fort von hier!

妖精1 :
舌先分かれたまだら蛇よ、
ハリネズミやイモリよ、あっちへお行き!
お后様のもとで
悪さをするな
去りなさい、ここから!

Chor der Elfen:
Nachtigall mit Melodei
Sing in unser Eiapopei,
Eiapopei! Eiapopei!
dass kein Spruch,
kein Zauberfluch
der holden Herrin schädlich sei.
Nun gute Nacht mit Eiapopei.

妖精たち:
小夜啼鳥よ、美しい調べで
私たちの子守歌を歌っておくれ
うら、うらうら…
おまじないの言葉も、
呪いの呪文も
愛しのお后様に悪さをするな
さあ、子守歌でおやすみなさい

2. Elfe:
Schwarze Käfer, uns umgibt
nicht mit Summen, macht euch fort!
Spinnen, die ihr künstlich webt,
webt an einem andern Ort!
Macht euch fort!

妖精2:
私たちの周りの黒い甲虫たちよ、
ぶんぶんいうな、あっちへお行き!
機織りする蜘蛛たちよ、
よそでやっておくれ
去りなさい、ここから!

Chor der Elfen:
Nachtigall mit Melodei
Sing in unser Eiapopei,
Eiapopei! Eiapopei!
dass kein Spruch,
kein Zauberfluch
der holden Herrin schändlich sei.
Nun gute Nacht mit Eiapopei.

妖精たち:
小夜啼鳥よ、美しい調べで
私たちの子守歌を歌っておくれ
うら、うらうら…
おまじないの言葉も、
呪いの呪文も
愛しのお后様に悪さをするな
さあ、子守歌でおやすみなさい

1. Elfe:
Alles gut! Nun auf und fort!
Einer halte Wache dort!

妖精1:
これでよし! さあ、あちらへ!
ひとり離れて見張りをしなさい!

フィナーレ Finale: Allegro di molto

Chor der Elfen:
Bei des Feuers mattem Flimmern
Geister, Elfen, stellt euch ein!
Tanzt in den bunten Zimmern
manchen leichten Ringelreihn!
Singt nach seiner Lieder Weise,
singet, hüpfet, lose, leise!

妖精たち:
灯し火の揺らめく微かな輝きの中で、
精霊たちよ、妖精たちよ、姿を現せ!
色とりどりの部屋で踊れ、
輪になって軽やかに!
あとに続いて歌え、
跳ねろ、気ままに、踊れ、軽やかに!

1.Elfe & 2.Elfe
Wirbelt mir mit zarter Kunst
eine Not' auf jedes Wort;
Hand in Hand, mit Feengunst,
singt und segnet diesen Ort!

妖精1・妖精2:
繊細な調べを奏でよう
ひとつひとつの言葉に音符を添えて
手を取り合い、妖精の祈りとともに、
歌い、この地に祝福を!

Chor der Elfen:
Nun genug, fort im Sprung!
Treff' ihn in der Dämmerung!

妖精たち:
さあ、もう十分だ、跳んでいけ!
夜明けに王様のもとに戻ろう!